

1. 開催年月日：令和7年11月11日(火) 16時～

2. 開催方式：対面、web会議ツールにて実施

3. 委員(順不同・敬称略)

出席：鈴木 嘉一・尾形 敏朗・山川 鉄郎・倉田真由美・馬場康夫

web会議ツールにて出席：宮崎 美紀子・神田 由築

事前意見を提出：砂川 浩慶

放送事業者

代表取締役社長：宮川 朋之

執行役員：桑田 靖

編成制作局 局長：小川 英洋

編成制作局：三品貴志（編成部）、三瓶祐毅（編成部）、八巻洋平（編成部）

番審担当：澤 尚志、碓井恭子

4. 議題

(1) 審議事項：時代劇専門チャンネル『奇跡の軌跡を大放談！「侍タイムスリッパ」しゃべりすぎ座談会』

(2) 報告事項：日本映画専門チャンネル「5ヵ月連続 相米慎二4K」

5. 議題（1）

2024年8月に単館上映された自主製作映画『侍タイムスリッパ』は口コミで話題となり、結果全国380館で公開され、日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞するほどの社会現象になった。25年6月のテレビ初放送に合わせ、安田淳一監督や主演俳優・山口馬木せらによる座談会番組『奇跡の軌跡を大放談！』を企画。裏話に加え新情報も飛び出し、番組放送後はSNSでも好評を博した。関連企画として6月は山口と冨家ノリマサ出演の時代劇特集も放送した。

【審議のポイント】企画全体、番組内容について、自由闊達な意見を求める。

6. 議題（1）審議内容 ※文中敬称略

・『侍タイムスリッパ』は公開前の試写で鑑賞した。明治維新を前にした侍と、活気が消えかけている東映京都撮影所を重ねた着想に感銘を受けたが、日本アカデミー賞で最優秀賞を総なめにするほどの大ブームになるとは予想外だった。安田監督や俳優陣の熱い思いが観た人の心に伝わり、いい作品だと認めるだけでなく、大好きな作品となる現象になったのだろう。時代劇専門チャンネルが応援するのは当然で、座談会や出演者特集は配信ではできない企画だ。本チャンネルが制作に直接関わらなかったことが、製作陣の純粹さを結果的に強めたのかもしれない。メイキング映像はスタッフが少ないとあまりなかったのか？

・安田監督自身は『カメラを止めるな』を意識していたと語っていたが、本編はヒットさせたいという監督の気持ちが先走っているように感じた。安田監督が自己資金で映画を作り、脚本もオリジナルで勝負したと聞いていたので、座談会を興味津々で鑑賞した。俳優の魅力もさることながら、この映画は安田監督にいちばん魅力がある。座談会では監督が前面に出て話し、有意義な内容になった。これまで主演作がなく、スターとしては注目されることのなかった山口や冨家がキャスティングされた理由や経緯を知りたい。

- ・本作は空前の傑作。世界中に広がり、いつまでも残る名画だ。悪いキャラクターがないから観ていると登場人物をどんどん大好きになるし、映画で好きになった俳優たちが楽しそうに座談会でトークする姿を見られるだけでもうれしくなれた。山口馬木也が途中で、監督の「ヅラ」発言で現場に緊張が走ったエピソードは興味深かった。私自身は京都太秦で仕事をしていないので体験していないが、時代劇撮影での厳しいしきたりやルール、剣会についての噂など、もっと掘り下げてほしい。時代劇で大ヒットした安田監督の観点で、京都撮影所での時代劇撮影の大変さやおもしろさを解説する企画があれば観てみたい。
- ・大好きな映画であり、時代劇を救った作品。普通の座談会は出演者のトークだけで構成されるが、今回は普段から時代劇をよく観る時代劇専門チャンネル視聴者に向けた番組であることを意識し、床山、衣装、照明などスタッフの証言を太秦で撮影した心配りを評価したい。私も安田監督が迂闊にも「ヅラ」と発言したエピソードはもっと聞きたかった。それというのも、私は太秦に取材で行ったことがあるが、松竹撮影所でも東映撮影所でも「あっちはもっと怖いで」と冗談半分で脅された記憶があるからだ。本格時代劇を好む視聴者に、視聴率も含めて異色の「侍タイムスリッパー」がどう受け入れられたのか気になる。
- ・座談会はとても楽しめたし、本編のエンドロールを見て様々な役割で同じ人の名前が何度も出る現象には笑った。俳優の沙倉ゆうのの名前が助監督や小道具にも出てくるなんて普通はありえない。本編だけ見ていると事情はわかりにくい、座談会と本編を何度か繰り返して観て納得した。出演者も含めてみんなが表も裏方も色々な役割を掛け持ちして、ようやく完成した映画なのだ。映画の成り立ちやスタッフ体制が普通の映画とは全然違うことに焦点が当たっていたが、もっと当ててほしかった。沙倉ゆうのの母が刀の管理担当だったとか、インディーズらしい手作り感のあるエピソードを座談会で語ってほしかった。ミーハー的に言うとブルーリボンや日本アカデミー賞の授賞式の映像も差し込んでほしかった。
- ・『太秦ライムライト』や『スローな武士にしてくれ〜京都 撮影所ラブソディ〜』など、時代劇愛と撮影所の裏側を絡めた作品を繰り返し放送してきたのが本チャンネルだ。『侍タイムスリッパー』は時代劇愛を追求してきた地道な積み重ねがあってこそ、誕生したのだろう。出演者に関西の役者が多く、京都の撮影所でコテコテの関西弁でしゃべる姿が良かった。座談会での和気あいあいとした雰囲気は、現場でもきっと同じだったのだろうと感じた。安田監督が撮影したというトロント映画祭の舞台挨拶で、山口が自分が演じた高坂新左衛門と同じように合掌してお辞儀していたのが印象的。山口がラストで「この作品はこれからの自分にとってのライバルだ」と言ったとき、それまで終始おちゃらけていた監督がサッと真剣な表情に変わった瞬間をカメラが抜き、監督も同じ思いなのだと感じた。その一瞬を見逃さなかったカメラマンに感謝したい。
- ・まさに裏話満載の座談会で、これを観たあとで再度『侍タイムスリッパー』を観て、話題に出たシーンを確認させる訴求力があつた。座談会は今まで『侍タイムスリッパー』を観ていなかった人にも「観たい!」と思わせる内容。安田監督の並外れたこだわりを伝える出演者のみなさんは、諦めと驚嘆が入り混じった表情でリアルだった。他方で、本当にケンカになったシーンの話ももっと聞きたかった。本作が並外れた興行成績を上げたインディーズ作品であったことを、フリップ1枚でいいのでデータとして示して欲しかった。時代劇のインディーズ作品を取り上げることは、時代劇専門チャンネルとして意義があるので今後も続けていただきたい。
- ・座談会に出演するのは監督と出演俳優だけで、司会のような第三者的立場がないと身内ネタで盛り上がるのではと心配したが、司会を立てない方が本音が引き出せたようだ。4人のトークに、太秦スタッフへのインタビュー映像が挟まれ、コメントが立体的になっている。富家ノリマサがクランクインしたとき、他

のスタッフがトイレに行っているのかと思うほど小規模の撮影隊だったとか、安物のSDカードを使ったせいで撮り直しになったとか、インディーズ映画らしい苦労話や失敗談に笑った。山口はもちろん、富家にとっても『侍タイムスリッパー』は代表作になるだろう。スポットライトを浴びることのない脇役に目を付けた安田監督のキャスティング力は素晴らしい。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

- ・メイキングについては映像・写真ともに監督から提供されたものを使用した。座談会は普段チャンネルを観ていない視聴者にも届き、本編を鑑賞する流れにつながったようだ。
- ・安田監督のお名前は存じ上げなかったが、山口馬木也という俳優を映画の主演に据えようとしたそのご決断に、まず驚きと敬意を抱いた。しかもそれをテレビではなく「映画」でやろうとしている—その話しを伺ったとき「この監督はいったいどんな世界を見せようとしているのか」と強く興味を惹かれた一方で、そこから一歩踏み込んでお話を聞ききれなかったことを、今になって後悔している。

座談会の番組自体は、一見すると地上波のバラエティ番組のような構成だったが、中身は作品にしっかりと特化し、芯の通った内容だった。本日、先生方のお話しを伺い、メッセージを届けるためには、この番組のような「見やすさ」や「入りやすさ」も非常に重要であり、時代劇専門チャンネルにおいても、こうした番組作りは十分「あり」だと確信した。

現在は、SNSの発達によって口コミが猛烈なスピードで拡散し、それに歩調を合わせるようにシネコン側もスクリーン数を一気に広げていく時代。その結果、大ヒットする作品は驚くほどの大ヒットとなる一方で、そうならなかった作品は徹底的に埋もれてしまう—そんな「格差」を生む構造ができ上がっていると感じている。公開から一年が経った今だからこそ、安田監督ご自身に、あの現象はいったい何であったのか、冷静に振り返って分析していただく企画は、「専門チャンネルらしさ」のある試みとして、非常に意義深いのではないかと考えている。

- ・有料放送の時代劇専門チャンネルは専門性があり、地上波とは違う見せ方があっていい。安田監督が「ゾラ」と発言したエピソードは、監督抜きで出演者3人だけだったら、もっと深掘りできたように感じた。もう一度本編を観たくなる座談会で、多くの視聴者に楽しんでいただけたのではないかと。我々は今後も時代劇を制作するが、時代劇という手法を使って多様な作品を作っていきたい。

7. (2) 報告事項

- ・日本映画専門チャンネル「5ヵ月連続 相米慎二4K」について
8~12月まで、故・相米慎二監督作の4K放送を実施している。8月には『台風クラブ』の工藤夕貴を、9月には『夏の庭 The Friends』に戸田菜穂、10月の『お引越し』には田畑智子、11月『風花』では浅野忠信、12月には『シヨンベン・ライダー』で永瀬正敏をトークゲストに招き、貴重な証言を放送する。毎回どのゲストからも熱量のあるお話を伺えた。
- ・相米監督の作品が時代を超えて4Kで甦り、その出演者の方々がゲストとして思い出や魅力を語ってくださる番組と合わせてお届けできることは、たいへん「専門チャンネルらしい」企画だと感じている。

8. 連絡事項 次回、第96回は2026年2月10日(火)、15時から対面、オンラインのハイブリッドで開催予定。